



□原色版『山形風俗』はワットマン九ツ切。『緑色の流』はワットマン半切大にして、場處は信州上高地、穂高山の麓なり。

『糸満の刳舟』はワットマン四ツ切大にして、琉球の寫生。『飯坂』も四ツ切大にして、昨年五月故人が飯坂、鹽原方面に旅行せられし時の作品なり、本誌八十四號、飯坂と鹽原の旅行談を參照せられたし。

□ニコルソン氏は有名なる挿畫畫家にして、本號所載の『Coaching』は戸張孤雁氏の所藏せらるゝものなり。

□日本水彩畫會三月例會は三十一日開會、岡、永地、眞野氏出席出品點數六十六點、本誌所載河上左京氏作『女』はワットマン四ツ切大にして出品畫中の秀逸の一つなり、寫眞版不出來にて原畫の趣を失ひしは遺憾なり。

□次號には石川欽一郎氏の『風景』相田寅彦氏の『習作。パンヂー』坂本繁次郎氏の『裏畑』故大下藤次郎氏の『遺作』を原色版

として掲載すべく、太平洋畫會出品畫、及び青木繁氏遺作を寫眞版として挿入の筈

□展覽會出品畫の原色版は製版間に合はざる爲、來月號に掲載出來ず追々掲載すべし。

□岩村透氏及び岡田三郎助氏の寄稿を本號に掲載のはづなりしが、締切の都合により鶴澤氏の『續三脚物語』服部氏の『繪畫美學』石川欽一郎氏の『調色について』並に山崎紫紅氏の『劇の背景等』と共に次號に掲載すべし。

□小林鐘吉氏山本森之助氏は今回本誌の賛助員たるを承諾せられ來月號より寄稿せらるる筈なり。

問に答ふ

■一、絶對的に陰影の部は透明色を用ひ日光等の直射せる部分は不透明色を用ふべきものにや。二、ニュートン製繪具に

SL、SO、NO、等の符號ありその意御教示下されたし。三、比較的變色又は褪せざる緑色の繪具（單獨に又は混合

色に）を御教示下されたし（成節生）◎

一、否自然に其様な規定のあるべき筈なし、只比較的さういふ場合の方が多といふに過ぎない、二、SDの符號のある色は、スペシヤル、リストの色で之は互に如何う交ぜ合せても變化も變色もせぬ事が保證されてあるものゝ由（八十四號石川欽一郎氏談）

二、美しき線にてはピリジャン、くすみたる線には、オリブグリーン等比較的不變色なり。

■一、水彩水貼縁貼紙を手製せんとす其方法を問ふ、二、遠近法を學ぶには如何なる事物が宜しきや適當の長書を御示し下され度し◎一、美紙或は馨水引等の紙を横に三四分位の中に切ればよし、紙は摸造紙等にててもよし、二、小島憲之、川村孝共著、用器畫教科書透視圖法（三之卷）發賣所は京橋區南傳馬町二丁目黒書店。

■一、洋畫を學ばんには研究所に入ると畫家の門生たるとは何れが宜ろしきや、二、日本水彩畫會研究所生徒男女數及び

全會徒の年齢の制限を知りたし、三、生徒の品性最も高く成績最も善良にして其他の設備の完全なる理想的の研究所あらば知りたし、(豊臣秀吉の孫) ◎一、美術學校か又は研究所に入るを可とす。二、現在の出席者人数各科を通じて五十人程目下女子の通學者は一人なり、年齢の制限なし、三、不明。

■一、日本水彩畫會研究所を卒業し如何なる道に入れば畫伯に成り得べきか。二、故大下先生の畫集の發行期を問ふ。三、關西支部事務所々在所を問ふ。四、本年は夏期講習會を開會されませんですか。◎一、藝術は一生の研究なれば他の學科の如く、規則的にどう云ふ方法がよいと云へない、只當人の心掛次第である、才分の必要なる事は勿論である、其上に健固なる意志と、眞面目なる研究を続けると云ふ事が肝心である。二、未定、三、卷末の水彩畫會會告の内を見られたし。四、未定。

讀者の領分

■『みづゑ』四月號は、挿繪も本文も、皆非常に有益な物ばかりでした、每號このように、内容の充實した雜誌を、出して下さるのは、我等の大なる幸と思ひます、深く編輯の方々へ感謝します。岩村、岡野、岡田、吉田、藤島、諸先生が、賛助員たるを承諾された、との記事を讀んだ時、心は躍りました。(成節生) ■八六號の繪畫は眞に善くあつた、奮つて居た、第一枚目の原色版ハドソン河はさすが萩原氏の筆に成りしものにして非常によく感じが著はされて居る、アルプス山中の白雲岩、馬鹿に大きな岩がつたつて夕陽に反射して居る、様いかに立派だ直は小島氏の山岳水彩畫家を對照して見ると又一段面白かつた、故大下氏の椿は實にうまい、目がさめるやうな奇麗な色を使はれて描かれて有る、本誌に故人二人の原色版が出て居る故に直はコスモスを思はせる、肖像畫は背色と前略がつり合ふ、戸張氏の餘興頗る得意世界天地我一人か?大

下先生の繪日記實に巧に描かれて、一線も無駄がない、榎本氏の雪の朝當地にもこんなのが有る、終りに臨んで私のみづゑに對する希望は原色版挿繪を多くしてもらいたい、故主筆が歸らぬ旅路に途かれても續々斯道の大家が賛助下されるは愛讀者の此の上ない希望である、益々貴會の隆盛を祈る、又誌上に各大家の肖像を寫眞にして出してもらいたい(無名氏)

寄稿を募る

水彩畫寫生旅行、水彩畫展覽會紹介は批評、水彩描寫の經驗談、又は想錄、水彩畫に、關係ある書籍(和洋を問はずの批評、水彩畫家の傳記、等其他苟くも水彩畫に關係したるものは、種類を問はず、寄稿を募る。文體及び長短等は、凡べて隨意なり、他はすべて卷末の會告による、每號の登載文中優秀なるものは「みづゑ」一部を贈呈す(その號数は掲載の分か、もしくは次號たるべきこと)